

# シンポ・四国遍路と大学教育

㊤

## 遍路の専門誌を発行

【大和武生四国大学教授】

本学における四国遍路教育は①教養教育として「徳島研究・二単位」徳島に関するテーマ(阿波踊り、阿波藍、自然、人物など十三項目)を取り上げ、郷土に対する理

解を深める。その一つとして「四国遍路」を取り上げて、受講生百人前後②一年生対象の教養ゼミ「四国・徳島・再発見」郷土の歴史を知ろうで四国遍路を扱っている。通年、四単位の

科日本文化史コースの専門購読として古文書を読んでいる。その中に四国遍路関係も含まれる。受講生約四十人。佐藤学園長の強い希望により本年三月四国遍路の専門誌「いやしの道」を発行。四国いやしの道委員会を組織して全学で取り組み、毎年一巻出版の予定。

## 地域づくり感性養う

【寺峰孜高知学園短期大学助教授】

保健科学ゼミという科目がある。「身近な環境ウォッチング」といい、楽しみながら継続できる体験型学外授業。目的は自然や社会的環境を観察しながら地域づくり、街づくりのための感性を養うこと。

三十六番清滝寺や土佐市の商店街を見て回った。参加した学生のひとり植田亜樹さん(当時一年)は、地元新聞に次のような寄稿文を寄せている。「国道沿いにナンキンハ

## お接待の体験学習も

【市川ひろみ明德短期大学助教授】

「命」頭で考えるのではなく、体感する」と、星島一夫前学長の発案から三年前にはじめた。

科目(二単位)でスタート。講義を受け、スケジュールを練りこの年は地元愛媛を五日間歩いた。経験や準備不足による問題点も見えてきた。二〇〇二年度は四単位の

前年、試行錯誤の中で実験的に今治市および周辺部で歩き遍路を実施したところ好評。「地域文化論」二〇〇一年度前期

に。単位目当ての受講生が増加。当初五十名以上の参加者であったが、歩いたのは二十三名。さら



昨年度の「歩き遍路体験学習」受講生の体験発表

にサポート体制、学生の金銭的・時間的・体力的負担に課題を残した。そこで昨年度は通年科目「地域文化論I」および「II」に分け(二単位×2)、負担の少ないコースも選択できることにした。

接待体験学習をすすめる。本学科目の介護福祉科、幼児科、栄養科など専門性を活かしつつ、視野の広い取り組みを目指す。

この間①各班で責任をもつて準備②参加者にまともな準備ができて、助け合いながら歩いた③節談説教を聴くなどにより、地域の文化に関心が向いた④他大学の学生も同行、交流があった。

今後の課題として「歩かだけでよいか」「お接待を受けるばかりか」があり、対応を考える。学生が主体的に考え実行する「お

歩かだけでよいか」「お接待を受けるばかりか」があり、対応を考える。学生が主体的に考え実行する「お

## ゼミで札所を巡る

【上杉正幸香川大学評議員】

スポーツ社会学の見地から「遊びと人間ゼミ」を開いた。遊びと宗教がどこかで交わらないかという考えが背景。好奇心、探究心が人間を支えている。これは面白くなければ成り立たない。

この経緯を見ながら、大学の授業として「究極の遊び―遍路」もあるのかなと思っている。

遊びの中で自分を見つめる。どこかへ行つてみたい―旅に出る。そこに何があるのだろうか、どんな自分が現れるのだろうか?と考える。

こんな中で、ある学生が「遍路に行つてみよう」ということから、ゼミ生四人と私で霊山寺・藤井寺を歩くことになった。装束も整えて。

学生は「足が痛い」「なぜ歩いているか分からない」。切幡寺前の薬局に寄つたところ「歩いてい

の時代、時間をフルに使つて歩けるというのは贅沢なのだ」と思うようになる。お寺では他の巡拝者が一所懸命に般若心経を唱えている。「あの人たちは、なぜあんなに熱心に経を唱えるのか。我々は何をしてるのか」と考えたようだ。